２．教員の自著紹介

大室剛志『動詞と構文』研究社

研究社から刊行された全10巻からなるシリーズ「英文法を解き明かす―現代英語の文法と語法」は、英語語法文法学会が2012年に設立20周年を迎えたのを期に、学会で培われてきた活動成果を広く社会に還元すべく、出版を企画したものである。本書は、そのシリーズの第２巻にあたり、本書のタイトルは「動詞と構文」である。

本書の目的は、英語のどの構文１つを取り上げてみても、そこには基本形、いわば典型的なメンバーと、その典型からずれた変種が存在するということを、英語の自動詞構文（第２章から第４章）と他動詞構文（第５章から第８章）をいくつか具体的に取り上げて、実証的に示すことである。

本書の構成は以下の通りである。

第１章では、「基本形と変種」と題し、構文を扱う前に、英語の動詞 climb を取り上げ、構文よりは小さな、しかし、同様に言語の基本的な単位の１つである単語の意味にも、基本と変種が存在することを確認している。続いて、「自動詞と構文」、「他動詞と構文」を扱う前に、英語の関係節構文を取り上げて、そこにも基本形と変種が存在することを確認している。

第２章から第４章では、「自動詞と構文」を扱っている。基本的に自動詞である動詞が用いられている構文として、第２章では同族目的語構文（例えば、Dr Gerard smiled a quick comprehending Gallic smile.）、第３章では動作表現構文（例えば、Miss Marple nodded agreement.）、第４章では One’s Way 構文（例えば、Rusty vehicles belch their way around the pot-holed streets.）を取り上げて、それらの構文に基本形と変種が存在することを実証的に示している。

第５章から第７章では、「他動詞と構文」を扱っている。第５章では、使役構文（例えば、Bill caused Harry to die on Tuesday by giving him poison on Monday.）を取り上げ、使役構文で用いられる動詞の性質（例えば、force（無理に～させる）、prevent（無理に～させない）、pressur（圧力をかけて～させようとする）、impede（～するのを妨害する）、help（～するのを助ける）、let（～するようにさせておく）、drag（ひきずる）、throw（投げる）、constrain（～させないようにしている）、frighten（怖がらせる））からして、様々な使役構文が存在することを示している。第６章では半動名詞構文（例えば、Masao was spending his vacation working at the Matsumoto factory in Tokyo.）を、第７章では他動詞が使用される You scared the living daylights out of me. に代表される構文イディオムを、第８章では d’rather が節を直接従える構文（例えば、I’d rather you didn’t say anything at all than be dishonest.）を取り上げ、そこにも基本形と変種が存在することを実証的に示している。

第９章では、それまでの「自動詞と構文」、「他動詞と構文」の実証的な研究を基に、文法の核と周辺、構文の核と周辺について論じている。

本書全体を通じて、語の意味の基本と変種、構文の基本形と変種ということが解明されてくると、その副産物として、「基本的な事項から高度な事項へ」という文法事項の配列順序の決定に関する原則に客観性を与えるという形で、英語学における研究が英語教育にも貢献できることが示されている。

本書に関しては、雑誌『英語教育』（2019年１月号92ページ、大修館書店）において、神戸大学人文学研究科言語学教授岸本秀樹先生による「本書で展開されている考察では、英語に関するさまざまな興味深い事実が明らかにされており、ことばのダイナミックな側面が見事に浮き彫りになっている。」との書評が既になされている。